

総説

神道が本当に宗教であるかどうか現代の学者もまだ良く分からない。その疑いの理由は色々がある。まず神道の成立が日本の民族文化の生まれとほぼ一体であるので、神道が日本人の日常生活の中に非常に織り込んである。その上、どこかで神道に触れているはずの日本人に「神道とは宗教であろうか日本人の日常生活に浸透した文化であろうか」と質問したら、はっきりした答えをすることが出来ないであろう。こういう立場を考えて見れば、神道を宗教文化と言えるかも知れない。しかし、神道が宗教ではないと確かに言えないであろう。一般的に人性の歴史の中には宗教を奉じない社会が一つもないからである。神道には神々を礼拝するから宗教と言えるが、世界の他の宗教と反対に道義の学説か純粹哲學的な教義を殆ど欠いているということである。

以上の問題は別として、多くの日本人が神道と仏教との区別を良く分からないということに留意するのも面白いと思う。日本人と日本の宗教について話すと、いつも一番驚かすのは、日本人が神道の神様と仏教の仏様とをよく混同して、仏教の神様と神道の仏様という表現も聞いたことがあるということである。その上、多くの日本人が両方共(神道と仏教)を信じて、時には神社また時にはお寺へ参ることがある。例えば、結婚式は一般的に神道の雰囲気に行われているが、葬式はこれに反して、大体僧侶の指導の下に営まれているという事実がある。六世紀に仏教が日本に採用してから、日本の土着の宗教と新しく採用した仏教を区別することが必要になったので、土着の宗教に「神道」という名称を付した。その時は神道と仏教との区別がはっきりだったけれど、だんだん互いに要素を引取ったであろう。例えば、現今神社を代表する鳥居のあるお寺もある。そういう現象は一神教信者である西洋人には考えられないことである。

神道の分類

神道は一般的に神社神道と教派神道と民俗神道に分けることが出来る。

I、神社神道は古神道の時代から今日まで歴史的社会的に神道の主流をなし、国家や地域社会の団結統合に深くかかわってきた。それは教祖をもたないが、神社を精神的結合の中心とし、日本神話や神道の伝統に根ざす教説と、宗教的な実践と、氏子などの信仰者による組織をもなっている。

II、教派神道とは、日本在来の宗教伝統を基盤に十九世紀頃日本に形成された十三派の神道教団を中心とする神道の運動をいう。その特色は復古神道または個人の宗教体験をもとにして、教祖あるいは組織者を持ち、主として庶民階層の間にそれぞれ一個の教派を形成した点にある。

III、民俗神道とは、民間信仰の中でとくに神道と関係深いものをいう

(2)

。世の中には社会の底辺に教团的組織もなく教義的な思想体系もなしに、一般民衆の間で行なわれている民間信仰がある。民間信仰にはい道教・仏教・キリスト教のような外来宗教の断片またはそれと習合したもの、(2)ト占・呪術・民間療法などの古代宗教の残留とみられるもの、(3)田の神・屋敷神の信仰や日待・こもり祭・浄めの習俗など神道の下部構造をなすものなどあり、民俗神道とは主としてこの第三を指す。

これらの三種の神道は互いにかかわり合っている。神社神道と民俗神道の相違は規模の大小と組織化の強弱にあり、一応の区別は出来ても兩者の間に学問的な境界線を引くことは困難である。また教派神道の信者は殆ど神社の氏子を兼ね、民俗神道的な習俗を今日も伝えている。

神道の歴史

神道の歴史は大体四つの大きな時代に区分することが出来る：

A、神道が仏教、儒教、道教、キリスト教などの外来宗教の影響を受けない以前の時代。

日本における文字は、中国語の漢字から来たので、中国の文物の輸入、すなわち、仏教の伝来の前に原典が全然なかったであろう。だから、それ以前の純神道は、太古の口頭伝説が後世に文献となったものや考古学のわずかの情報のもたらすものなどだけから推察出来る。そういう口頭伝説は八世紀に完成された古事記(712年；和銅五年)や日本書記(720年；養老四年)などに記録した。この神典の表現のうちには、強い中国の影響を見付けるが、エルベル教授と多くの他の西洋学者によつて、神道の神話は必ず全く独創的なものである。

B、仏教とその他の外来宗教が渡来してからの時代。

日本書記によれば、仏教が西紀五五二年(欽明天皇十三年)に日本に伝来された。その仏教が多くの中国の文物をもたらした。新しいものを知らたがる日本人は、その輸入された信仰やそれと共に中国の文化をすでに付加物として受け容れた。

インド系の仏教は、中国および朝鮮半島に受け容れられる為に不純化を受けてきたが、それがアジア大陸から孤立した日本島国へ広がる時に、またもう一度全く変形された。日本仏教の諸宗派は中国の宗派からの継承を主張し、しばしばその名称も保持するが、実際には、多くの場合、その教義において違いがあって、さらに、実践においては中国の同じ宗派よりもっと甚だしい。

仏教が輸入してから、偶像が何もなかった神社においては仏教的な偶像が安置された。この現象が早くから観察出来るが、広く一般化したのは鎌倉時代からであつて、神仏習合と呼ばれる。

それによれば、一方の宗教の神は真の基本(本地)と考えられ、他方のそれはその具現(権現)または外相(垂迹^{スサノリ})と信せられたが、兩者が個別の全体を形成する。(本地垂迹説)

仏教の外に儒教や道教やキリスト教などもだんだん日本の文化に浸透したが、日本文化が仏教から一番大きな影響を受けたと言われている。

C、神道が仏教と分離された時代

明治時代（1868年～1912年）の最初の数年間にはかなり変動的な政策が発表された。その中には神道と仏教との完全な分離も指令された。この指令の例を以下に示す通り：

一、神社に関する仏僧はすべて還俗しなければならないこと。その仏僧の中には神職に再指示された人々もいた。

二、仏像を神体とする神社はすべてそれを直ぐ取り替えるなければならないこと。

三、前に仏僧であった神職は仏教との放棄の証明として、その髪を延ばさなければならないこと。

四、上位神職の世襲家族からその永年の特権を奪わなければならないし、すべての神職を精選しなければならないこと。

五、僧侶は、神が仏の権現であり、仏は神の本体であるということをも十分に信じなければならないこと。

この明治の宗教的な動乱期には仏教の美術品や文献が多くの神社から持出されて、大きい火に投げ入れた。しかし、運良く、この宝物の一部をひそかに持出して自宅に保存した仏教徒もいた。

①、神道の国家管理の廃止の時代。

第二次世界大戦に勝利を得たアメリカ軍隊は、神道が日本人の愛国心を増して、そういうふうに世界の平和を危険にさらせることを信じていたので、国家と神道宗教との分離を果たすことを指令した。

日本古代宗教における自然神信仰

日本の古代には高度な農耕文明が築かれたので、自然と人為ははっきり区別されなかったであろう。むしろ人間はますます風土と一体化して、自然を尊重し、その恵みに人為以上の神意を感得する。だから、人為が自然に触れる日本人は自然の諸相に神々の靈力を見るにちがいない。

古代人はその周囲の自然の全体を神聖視し、そのすべてに対して宗教的な態度を取ると思われているが、事實は特殊なものだけが選ばれて宗教的対象とされる。その上、特に選ばれて、その宗教的対象となるものは、民族と地方とによって違う。例えば、牧畜民が家畜を神視し、耕作者が穀物を宗教的対象とする。

古代の日本人がなぜ自然の諸現象に神的なものを認めたかという、彼等の生活が自然によって影響され、支配されたからであろう。日本の神々が人間に対して支配的な勢力をもつものであった。宗教の方面では神と人とは支配者と被支配者との関係が考えられた。かくて神は一箇の支配者として作用するが、自然の中に住んでその影響の下に生活したこの人々にとっては、何よりもまずその自然的な諸現象こそ強大な支配力を自分達に及ぼしてくるものであった。そこから、それらはいずれも神的なものとされた。そして日本人は尊る神々が大自然や石や動物などの姿に具象化されると信じている。

自然と神道

古墳時代（三世紀末から七世紀ごろまで）になると、日本の神道の祭

(4)

祀が確立されたと考えられている。山を中心とした祭祀の遺跡をみると、富士山のような火山性で姿の良い山が対象となっている。山と似て、島も海上波打際に社殿を建てる祭を行っている。数回の調査によつて、古墳時代の多くの祭祀遺跡を発見している。その中には銅鏡、武器、容器、碗、壺などの祭具が見付けた。

上に以に見えるように日本の古代宗教だけではなくて、神道も自然を基調とする。神道と自然との深い関係は自然には多くの種類の神がいるということに一番はっきり表われていると思う。例えば、神道は自然の中に石、樹木、動物、山、水などを神様として礼拝する。これからこの自然の要素を一つ一つ簡潔に説明したいと思う。

石：石を神として祭る風習が日本にかなり早い起源をもつことは、文献的な証拠があんまりないけれど、後世の民俗から推測できる。時々石神は水神とみなされている。雨乞の対象として石神を祭る習慣が今日もまだ残っている。雨乞の時は人々がその神と思われている石を川の中に入れて、すっかり擦る。

石神は雨乞の対象だけではなくて、懷妊や五穀の豊産も石神の祈りの対象である。つまり、石神に懷妊を祈ったり、雨を乞ったり、五穀の豊産を祈ったりして、はうばらのごとではなくて、それぞれ互いに関連する。すなわち、いずれも生産力と関係がある。

日本人が石を愛好することは著しい。石を愛好する性情に通じて、石は神聖な物として崇拜されることにもなった。そして、石が神とされる一つの理由はその固さにあるであろう。なぜかという、日本の風土はかなり変化があって、人々はそういう変化を通じて、自己同一を保つものを求めて、神が永久に堅固な常性ではなければならないものとして要請されるという理由からであろう。

樹木：村々の神社を歩くとそこには大抵御神木と名付けられた大木を見る。この神木は大体杉である。文献によると、こういう杉は稲荷の神木を指すもので、人々の稲荷詣というのもその杉を礼拝することであつた。(稲荷は五穀を司っている神様である。)

本来は杉森は神の所在であつたと思われるが、今でも全国の神社はよく杉森の中に位置されている。今の神社を歩いて見ると、神木の位置はまちまちであるが、本来の形としてはその大木の前に社殿があつた。

動物：動物の中に神として礼拝されているのは、蛇、猿、猪、狐、熊、鳥、虫などがいる。以下蛇だけについて何か書くのに限りたいと思う。蛇神の信仰が深く水稻の栽培と結合している。水稻は太陽の熱と光と十分な水の供給によつてのみ生えることが出来る。お米を主食とみなす日本人にとっては、日の神と水の神は必要であろう。その水の神は大体蛇の姿に礼拝されている。水稻の栽培は多分石器時代に中国方面から日本に来たであろう。それとともに蛇神の信仰も日本に来たと思われる。

山：毎日畑で働いている日本人にとって、田畑は俗な人間世界に属するが、その畑の背後に聳える山地は神の聖なる世界と思われる。山こそ神の所在であるが、時々神を山そのものにみなされている。古代日本における宗教的な聖地は深い山と幽かな谷に求められた。当時神に接し、その力を身に付けたと欲する人々は、幽谷に分け入たり、

峰に登ったりして、修練したのであった。

岩石も樹木も鳥獣もすべて山の中にあるから、山こそ神の全体と感ぜられたであろう。だから、山を神とするのはそうした包含的な意味にある。山神の中には火山の神は特別な位置をもっている。火山国に住んでいる日本人は火山の活動を怖じるが、それと同時に火山を崇敬する。火山の活動は人間がその火山を怪我した為だとか、祭りが足りない為だとか種々の判断がなされた。だから、火山の神がそういうことで怒って、その狂暴を噴火で表わす。これを避ける為に、火山神を礼拝しなければならぬであろう。

水：水は泉や川や沼や湖や海など種々の形に分かれているが、人間の生活に深くつながっているということはいうまでもない。つまり、水がなかったら、生育することが出来ない。それを考えてみれば、古代人の生活において、水が宗教的信仰の大きな対象になったことはもとより当然である。だから、古代には川や沼や湖や泉や海などが水神の神体と考えられていたであろう。